第35回

「荻窪の記憶」こぼればなし

# 日々のスケッチ

日々、時間の立つのが速く感じられてなりません。もちろん、年のせいなのですが、毎日が似ているせいもあるようです。しかし、ほんとうに同じ日などはありえません。小さな差異や発見を大切にすれば、時の流れに抵抗できるかもしれません。

◆

四月某日、家を出て駅に向かう。バス通りを渡って保健所の前を過ぎると雨がぽつぽつとしてきたが、カレーとシチューの店・トマトの前には、すでに三人の男性が並んでいる。いつもなら若者が多いのだが、三人とも中年の男性でスマホをいじっている。はるか昔、一、二度入ったことがあるが、いまでは行列に恐れをなして店の前を通り過ぎるだけだ。

駅に向かう商店街に出ると、ホーホケキョ、ウグイスの声が聞えてくる。最初は本当にウグイスが鳴いているのかと思ったのだが、音源は通りに設置されたスピーカーである。コロナ騒ぎがはじまった年には、うちの近所でもあれほど鳴いていたウグイスが、ここ数年ぱったりと鳴かなくなった。あのウグイスたちはどこにいったのだろうと思っていたら、商店街にウグイスの声が流れはじめたのである。もしかすると録音の声にヘソを曲げて、ウグイスたちは荻窪に近づかなくなったのではないだろうか、そう私は疑っている。

◆

善福寺川緑地を別にして、毎年花見の時期になると必ず見に行く近所の桜が何本かある。善福寺川にかかる忍川下橋のそばにある老木もその一本。桜・善福寺川・荻外荘につづく松林という風景は荻窪ならではだが、地元の人以外はあまり知らないと思われる。見ているとときどき近所の人がやってきて、満開の桜にカメラやスマホを向けている。きっと毎年のことなのだろう、桜の老木と近所の人々との目に見えない交流が感じられる。

◆

大田黒公園に回ってみると、すでに新緑の世界である。ふと見ると、馬酔木（あしび）の白い花が咲いている。

かつて、万葉集の番組をつくったときに知った歌を思い出した。

**磯の上に生（お）ふる**
**馬酔木（あしび）を手折（たを）らめど**
**見すべき君がありといはなくに**

「岩の上に生えている馬酔木を折りとろうと思うけれど、お見せしたいあなたが生きているとは誰も言わないので」（番組訳）

大伯皇女（おおくのひめみこ）が、謀反の罪で処刑された弟の大津皇子を偲んで詠んだ歌である。

荻窪地域区民センター協議会OB　松井和男